

実践報告

高校生がガイドする 地域の歴史

～ ESD を意識した日本史の授業～

埼玉県立朝霞高等学校教諭
川島 啓一

1. 地域をガイドする高校生たち

2010年度から日本史Aの2時間続きの授業を活用し、自転車に乗り地域を巡り歴史を探るフィールドワークにチャレンジしています。この授業における生徒たちの最終課題は、地域の歴史を伝えるフィールド（史跡・基地跡地など）に立ち、ガイド解説を行うというものです。生徒たちは、その目標にむけて事前に市史など地域の歴史に関する文献にあたり、地元の人や専門家（博物館学芸員など）から聞き取り調査をします。この間の活動は、基本的に2人以上の共同作業で進めます。通常の授業とは大きく異なる授業展開に、生徒たちはついてきてくれるのか当初は不安もありましたがそれも取り越し苦労でした。生徒たちはいきいきと作業に取り組み、積極的に外部の方と関わり、授業を楽しんでいます。私自身も、毎回の授業がワクワク・ドキドキで、この実践から多くのことを学ばせてもらっています。

2. ESD を意識する

さて、この実践を組み立てる上で意識したESD（= Education for Sustainable Development = 持続可能な開発のための教育）について、述べさせていただきます。すでにご承知の方も多いとは思いますが、ESDとは、2度の地球サミットの議論を経て提唱された国際的教育プログラムです。現在、ユネスコが中心となって世界中で実践されており、日本政府もその推進に力を入れています。文部科学省はESDの目標として「持続可能な社会づくりのための担い手づくり」を掲げ、具体的に育みたい力としては「①体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的・総合的なものの見方）②持続可能な発展に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他

性、機会均等、環境の尊重等）を見出す力③代替案の思考力（批判力）④情報収集・分析能力⑤コミュニケーション能力」の5点をあげています。また、その具体的な教育手法として「単に知識・技能の習得や活用にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチとすること」とし、参加型学習法の有効性を強調しています。

これらの要素をもとに、従来の教育とESDとを比較したものが、表1です。これをみると、従来の知識偏重・個別競争型の教育から思考重視・共同型の学びへの転換が行われていることがわかります。

私自身、このESDを意識する前の授業は、受験や考査対応に追われ、いかに効率よく知識をINPUTするかということに汲々としていました。しかし、果たしてこれですべてから必要となる思考力やコミュニケーション能力などは磨かれるでしょうか。はなはだ疑問です。だからといって一斉授業や知識や技能の習得を否定するつもりはありません。ただそれだけでは不足していると思うのです。現代社会に生きる生徒たちにとってOUTPUTの学び、共同の学びの経験が必要だと思えます。様々な分野でバランスが崩れ、社会的問題が噴出している今こそ、問題認識にとどまらず、問題解決・価値創造力をともなったバランスの取れたホリスティックな学びが求められているのではないのでしょうか。

	従来の教育	ESD
育みたい力	「基礎学力」重視 個別的知識や理解力 基礎・基本重視 個人の態度の寛容 標準性重視 知識・技能、量的価値 順応性・社会適応力 問題の認識・理解力 競争力	「生きる力」重視 体系的思考力（総合的理解） 批判力・表現力・創造力重視 持続可能な社会構造・生活の転換 多様性重視・関係性重視 体験・参画・行動力、質的な価値 能動性・社会構成力 問題解決能力・価値創造能力 コミュニケーション能力
手法	トップダウンの受け身型 結果重視 講義型・教師中心・管理 教え込み・暗記・テスト 個別化された競争的学習 一斉授業中心・個々の学び 一方的教授・知識技能伝達 同年齢・同質環境 (個人で完結) INPUT	ボトムアップの参加型 プロセス重視 体験型・生徒中心・育成 気づき・思考・意味の共有化 協同的・双方向的学習 多様な授業形態・学びの共同化 ファシリテート・学びの場づくり 異年齢・異質環境 (人に伝達) OUTPUT

表1 従来の教育とESD

3. ねらい

以上のESDの観点を意識して、本実践では以下に上げる5つのねらいを定めました。

①ガイド解説・ビデオ制作などの共同作業を通じて表現力・コミュニケーション能力などを育てる。

- ②地域の方からの証言の聞き取りや世代間の交流、「歴史をふまえた未来にむけての提言」づくりを通じて、地域の歴史の語り継ぎ部・未来の地域社会を担い手となる基礎を養う。
- ③歴史を掘り起こし、そのフィールドのもつ価値に気づき、仲間と共有する過程を通じて、地域の文化財保護や活用地域づくりを考える力を育てる。
- ④教科書に書かれた歴史と地域の歴史とのつながりやギャップなどを調べることで、多面的・総合的なものの見方や体系的な思考力を育てる。
- ⑤学びの過程を通じて、創造する楽しさ、伝える楽しさを感じ、知的好奇心を高める。

4. 授業の展開

(1) 地域の歴史の概要をつかみ、聞き取り調査へ

夏休み前までに、朝霞の歴史クイズ大会、通史と朝霞の歴史の対称年表づくりなどをおこない、地域の歴史の概要をつかむように取り組みました。6月には朝霞市博物館を見学。学芸員の方から展示解説を受け夏休み後のフィールドワークに備えました。

9月、生徒たちは2～3人のグループに分かれ、ガイド解説するテーマを決定すると、学校や地域の図書館での調べ学習と並行して、地域の方や専門家の方から証言を聞き取る作業を進めました。約30の方が快く協力をしてくれました。

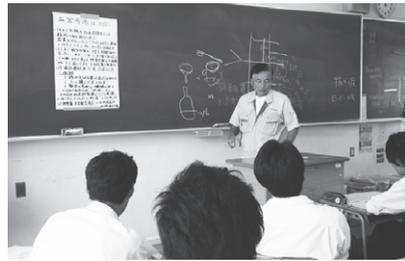
地域の方と生徒との出会いには、それぞれエピソードがあり、いずれも非常にドラマチックでした。その中の2つを紹介しましょう。

エピソード①…「蛇窪遺跡」という縄文遺跡を調べていた生徒2人の話です。彼らは、遺跡から4片の土器を掘り出し、それを市の博物館へ持ち込み、学芸員の方に鑑定を依頼しました。すると3片は縄文時代のものでしたが、もう1片は平安時代のものでした。学芸員の方によれば同地から平安期のものが発掘されたのは初めてで「これは新発見だよ」と言われ、生徒たちは大興奮。学芸員の方の「かけら一つでもその時代、その場所の様子がわかる」という言葉に感動していました。まさに歴史を掘り起こした瞬間でもありました。

エピソード②…生徒が通学路に二宮金次郎像が立っていることを不思議に思い、ある班がこの謎にチャレンジしました。ひょんなことからこの像が立っ



博物館で学芸員のレクチャーを受ける生徒たち



二宮金次郎像の謎について語る牛乳屋さん

いる敷地が本校と取引している牛乳屋さんの実家であることがわかり、その社長さんを学校にお招きしてお話をうかがうことができました。それによると祖父の代に朝霞地域で農業の大規模経営に成功し、県から表彰された記念に金次郎像を建てたそうです。その後、陸軍の予科士官学校などに土地を接収されてしまい、残った財産で乳牛をかって酪農に転換。戦後、食糧難の時代に牛乳を売って県下でも有数の企業となりましたが、高度経済成長期に大手の下請けとなり今日に至る、という牛乳さんの歴史が語られました。日常の何気なく通り過ぎている風景の中にも、地域の人々の歴史が刻まれていることに、生徒たちもビックリしていました。

一方、今回ご協力していただいた地域の方にとっても、この聞き取り作業は有意義なものになりました。二宮金次郎のことを語っていただいた社長さんは、高校生にいい加減なことを話してはいけないと親戚中に確認をとり、自ら図書館で朝霞の歴史を読み直され、教壇に立たれました。宿場町の聞き取りに協力してくれた米屋さんも、生徒の訪問に備えてあらためて近所をまわり、自作の宿場マップを作成してくれました。この過程で大人世代も地域の歴史遺産の価値や意味を再認識することができました。高校生による聞き取り作業は、大人世代の学びにもつながり、相乗効果をもたらしているのです。

(2) ガイド発表・ビデオ制作

2011年度に私が受け持ったクラスは2クラスあり、その内訳は、3年4組24名、3年5・6組40名でした。10月、いよいよガイド解説が始まりました。4組は24名全員が自転車で移動しました。各ガイドスポットでは、担当になっているガイド役の生徒2～3人が発表をおこないます。発表にあたって、事前の聞き取りなどを反映させること、できる限り自分の言葉を用いて発表することという指示を出しましたが、多くの生徒がシナリオを読み上げるに留まってしまいました。その中であって異彩を放ったのが、ジャズ喫茶の前でガイド発表を行った2人です。彼らはジャズ喫茶のマスターの証言をもとに演劇スタイルで発表をおこなったのです。このジャズ喫茶は朝霞に米軍基地があった1950年代から営業をつづけているのですが、生徒たちは、サングラスなどを使って扮装し、米兵役とマスター役にわかれ、当時の様子を再現してくれました。なお、発表当日はマスターも急遽同席されることになり、発表者の生徒たちは予想外の展開に驚き、当事者を前に冷や汗をかきながらの発表となりました。発表後はマスターからお褒めの言葉をいただききと安心でした。あわせて全員がマスターご自身の貴重なお話を聞くこともできました。予期していなかったことですが、生徒の発表と地域の方の証言がミックスすることでより理解が深まり、同時に信頼関係も深まったように感じました。

5・6組、40人については、全員でガイドスポットをまわることは不可能なため、情報科の科目「情報と表現」の選択者の協力を得て、発表方法をビデオ制作に切り替えました。発表をおこなう生徒たち2～4人に、情報科目選択の生徒2～3人がついてビデオ撮影するという形式です。生徒たちは小道具を用意したりしながら、楽しそうにロケに出かけていきました。タイムスリップして現地の人にインタビューする演出や旅の番組風の演出、制服を調べた女子生徒たちは実際にスカート丈の変遷をモデルを立てて表現するなど、さまざまな工夫が見られ、単にシナリオを棒読みするだけのグループは少数でした。情報選択の生徒からの撮影に関するアドバイスなどもあり、生徒の創造力や表現力に火がついたようでした。私も生徒たちのその豊かな発想力に驚かされました。1月には上映会をおこない、それぞれの学びを共有化しました。みんなは大喜びでした。

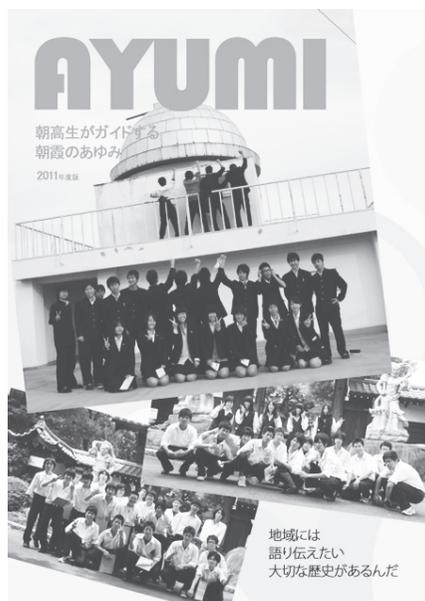
(3) 未来への提言づくり

12月の考査では「歴史をふまえた上での未来への提言」という題で小論文を課しました。朝霞の公務員宿舎建設問題の報道と重なったこともあり、基地の跡地利用に関する提言が目立ちました。また市に対して歴史資料館建設や歴史を語る看板の設置、歴史ツアーなどの実施を求めるような歴史を語り継ぐことの大切さをとくものも少なからずいました。

5. 生徒の感想から

ある生徒の感想です。「今回の学習を通して歴史を学ぶことの本質がわかったように思います。それは過去の出来事に触れることで未来をより良いものにしていくといくということです。…私は日本各地に歴史があり、それを学ぶことがこれから生きていく上で重要なことだと思うのです。実際に見聞することによって得るものこそ本当の歴史を学ぶことなのではないでしょうか」

この生徒の指摘どおり日本全国、地域には地域の歴史が存在しています。地域史の扱いが小学校だけで終わってしまうのは誠に惜しいことです。高校生の時期に地域をフィールドワークする意義は、生徒にとっても地域社会にとってもきわめて大きいと思います。



生徒の発表原稿をまとめて、ガイドブックを作成し、お世話になった方々に配布した。